むかしのくらし展 YouTube 版展示解説

◆台所（水周り・煮炊き）

むかしの台所は土間になっていました。この展示は、昭和 30 年代、板の間に改装された、という設定です。この頃、井戸やポンプなどを中心に、流しなどの水周りに関連するものが新たに設置されました。それとともに、ガスコンロやプロパンガス、水道・電気の整備が行われ、徐々に現在の台所に近づいていきます。

体感できること	注　目　点
○現代の生活と比べて、その違いがわかりやすい台所を中心に、水道やプロパンガスの普及など、昭和 30 年代に生活がどのように変わっていくかをみせながら、時代全体のイメージをつかませる。	○土間の台所から昔からのかまどや水がめが置いてあることに注目させる。 ○古い道具を使用しながら、利便性に優れた道具を生活の中に取り入れ始めたことを、羽釜と炊飯器、かまどとガスコンロ、手押しポンプと水道などを比較することで気付かせる。 ○手押しポンプの出口につけられた晒しの袋は、金気やゴミをろ過するためのもので、衛生面への配慮もあったことにも気付かせる。 ○この頃の買い物の包装は、パックではなく、新聞紙や包装紙だった。それをかまどやしちりんなどのたきつけに利用したことにも気付かせる。

・台所の水周り

さらにむかしは、井戸からの汲み水を水がめに溜め、ひしゃくで汲み出していました。やがて、井戸用の手押しポンプが導入され、久留米市郊外でも、だんだんと水道が普及していきます。水を汲むという従来の作業がなくなり、水道の蛇口をひねると水が出るくらしへと変わっていきます。しかし、風呂などは井戸水を利用し水道代を節約していました。その水汲みは、多くは子どもたちの仕事でした。

〔資料説明〕

①水がめ　陶器製のかめで、木のふたなどを用いる貯蔵用具。昭和 30 年代頃に溜め水はほとんど姿を消しました。

②じょうご　一升びんや徳利などに液体を注ぐときに使用します。注ぎやすいように口が大きく開いています。

③手押しポンプ　鉄の鋳物製。水道の普及後も長く活躍しました。風呂など、遠くへ水を送るためには竹樋を用いました。吐水口につけた晒しは不純物を除くためのもの。

④水道　旧久留米市内と御井町の一部に水道が通ったのは昭和 4 年ですが、普及率は 13%にとどまっていました。昭和 30 年頃は水道を引きながらも井戸と共用する家庭も多くありました。

⑤タイル製流し　　素っ気ないコンクリート製流しからタイル貼り流しの普及で暗い台所もカラフルになっていきます。

⑥ガスコンロ　　久留米市では、都市ガスの普及は大正 3（1914）年からと早かったのですが、利用の 73%はガス灯用でした。電磁調理器の普及も進んでいるが、現在でも火力が強いプロパンガスを使用している家庭も多くありました。

台所のようす

・煮炊き（調理する）

むかしから使われてきたかまどやしちりんは、この頃から、ガスコンロや電化製品に姿を変えていきます。かまどでは、薪などを使って火を起こすところから始めねばならず、温かいものを食べるには大変手間ひまがかかります。ガスと電化製品の普及は、炊事の負担を軽減する大きな変革をもたらしたのです。

〔資料説明〕

①かまど　　元々土間に作りつけるものでしたが、この頃、タイル貼りの「文化かまど」が登場します。

②羽釜・鍋　　「なべ・かま修繕」の職人が家庭を回り、なべの穴にリベットを打つなど、修繕をして長く大切に使いました。

③貝じゃくし　　竹や木製の柄にホタテ貝やイタヤ貝の貝殻を付けた杓子のこと。いわゆる「お玉」のこと。

④火消し壷　　かまどやしちりん、火鉢に火を起こすためには、紙や杉枝などから薪や

炭などに火を移して段階的に大きくしていきます。その間に薪の燃え残りや炭化した消し炭を使います。この壷には、煮炊きなどで使用した後の燃えさしの薪を入れ、ふたをかぶせて空気を遮断し火を消し、次に火を起こすときに再利用しました。

⑤しちりん　江戸時代以前から使われてきた煮炊き具です。燃料には、薪の他、豆炭や練炭なども用いられました。

⑥薪　薪拾いなどもしましたが、燃料屋で端材を売っていました。薪割りは子どもも手伝いました。

⑦豆炭・練炭・たどん　しちりんや火鉢に使う炭の粉を練り固めた燃料。

⑧うちわ・火吹き竹　風を送って火を勢いよくするためのもの。台所の必需品でした。うちわは、夏のお中元の頃、商店が得意先に商店名入りのものを配っていました。

・買い物

現在ではあまりみかけなくなったものを集めました。例えば、電気冷蔵庫やスーパーマーケットなどがなかったこの時代、買い物は日課でした。八百屋、魚屋、肉屋などを一軒ずつ回って買い物をし、新聞紙や経木にくるんでもらった野菜や魚などを買い物かごに入れて持ち帰りました。

〔資料説明〕

①壷　塩や味噌などの貯蔵に陶磁器製の壷類が多く用いられました。

②経木（きょうぎ）　「うすいた」とも呼ばれ、肉や魚などを包みました。防腐効果がある竹の皮も重宝されました。

③買い物かご　昭和 30 年頃までは、い草製のものが多くありました。後に樹脂製のカラフルなバスケット型に変わりましたが、やがてスーパーのビニール袋が普及してくると姿を消していきました。子どもたちの買い物のお使いにもこのかごを持たされました。小さなかごですが、基本的に毎日買い物に出るため、1 日の買い物量は少なく、これで事足りたことがわかります。

◆板の間（収納）

土間だった台所を板の間に改造したという設定。そのため、居間より一段低くなっています。水屋ダンスが置かれ、食器が収納されています。いぐりやつりこしじょうけなど、従来からの道具とともに、電気炊飯器などの普及しはじめた電化製品が混じっています。伝統的な道具と新しい道具が混在した状況ですが、現在に比べて道具の種類や数が大変少ない様子がわかります。

体感できること	注　目　点
○台所からの続きで時代の雰囲気を感じさせる。	○いぐりやつりこしじょうけなど、むかしの道具が片付けられている。これらのむかしの道具が新しいものに変わっていく様子に気付かせる。

	○板の間は鰹節を削ったりすり鉢ですったりと作業の場であったことも説明する。

・収納

水屋ダンスは現在の食器棚。水屋ダンスの上部や奥には、電気炊飯器の普及で使われなくなったいぐりや、樹脂製のコップに押しやられた陶器の茶碗などがあります。引き出しの中には、栓抜きや氷かきのほか、包装紙やひも、紙袋などが再利用するため、大切に保管・収納されています。

〔資料説明〕

①水屋ダンス　大川家具と思われます。中には、主婦の使い勝手に合わせて食器類が並べてあり、流行の道具や万一の際に必要なものまで、様々な道具が収納されています。

②米びつ　ブリキ製で米をストックしておくもの。米を計る際は一合枡や五合枡を使います。

③踏みつぎ　高いところの物を取るための道具。脚の中の空間には小物などを入れました。

④いぐり　この中におひつを入れてご飯などを保温しました。今のジャーに役割が移ります。

水屋ダンスが置いてある板の間と台所

⑤電気炊飯器　　初期のもので、機能はお米を炊くだけというシンプルなもの。炊けたご飯はおひつに入れかえました。

⑥つりこしじょうけ　　夏場に使うご飯用の竹かご。ぬれぶきんで包んだご飯をかごに入れ、軒先などの涼しい場所にかけておきます。竹かごは通気性がよく、ご飯の腐敗を遅らせました。冬場の「いぐり」とともに、自然を利用したむかしの人々の知恵がみられます。

⑦氷冷蔵庫　　木製で上下二段扉になっています。上の空間には氷屋が配達してくる氷を入れます。下に落ちる冷気で下の庫内を冷やし、中の食べ物の腐敗を遅らせます。なお、断熱材として壁体内にはオガクズが詰められています。電気冷蔵庫が普及する昭和 30 年代前半頃までどの家庭でも使用されていました。

◆居間（食事・暖房・調度品・生活用品）

居間の中心的な存在としてテレビが登場すると、夕食の家族団らんの光景が大きく変わっていきます。しかし、部屋数も十分でない家庭は多く、電化製品や暖房器具の普及もあまり進んでいないため、居間で家族一緒に過ごす時間は多くありました。食事の後も、居間は子どもたちの勉強部屋になり、また寝室にもなりました。

体感できること	注　目　点
○時代が少しずつ動いていることをイメージさせる。	○ちゃぶ台を片付ければ広い空間ができるなどといった生活の知恵に気付かせる。 ○白黒テレビや黒電話など、昭和 30 年代に普及した家電や道具と、今のものとの違いに気付かせる。 ○インスタント食品や冷蔵庫が普及していない頃の食品にも気付かせる。 ○蚊帳などを通してむかしの人々の知恵や工夫に気付かせる。 ○今のくらしと比較することにより生活が便利になっていく課程も気付かせる。

・食事

電化製品が普及しはじめたこの頃の母親は、まだまだ家事に時間を取られ、忙しい毎日を過ごしていました。また、家族がばらばらの時間帯に温かい食事を取ろうとしても、その度に火を起こし直さなくてはならないので、みんなで一緒に食事を取りました。食卓の上のおかずはあくまでも「副食」に過ぎず、現在と比べるとずいぶん質素な食事でした。

〔資料説明〕

①ちゃぶ台　狭い室内では、飯台も折りたたみ式で収納しやすいものが使われました。これ以前は、食事には各自用の箱膳が多く使われていました。

②茶碗かご　蔓や竹で編んだものが多く用いられました。

③保温ジャー　ご飯などの保温は、いぐり→保温ジャー→炊飯ジャーへと変化していきます。

④魔法瓶　沸かしたお湯を保温するだけの容器。今はコンピューター内蔵の湯沸し保温ポットが主流です。

⑤おひつ　羽釜で炊いたご飯を食卓に運ぶ際に使われる容器で、食卓でそれぞれの茶碗につぎ分けます。保温はできないのでご飯は冷えてしまいますが、適度に水分が飛んで、冷めてもおいしくいただけます。

・暖房

日本では古くからコタツと火鉢が暖房の主流でした。しかし、これは部屋全体を暖めるものではなく、あくまでも局所暖房です。コタツは掘りごたつが多く、古くは少人数用のやぐらごたつ（置きごたつ）も使われていました。室内を暖める石油ストーブは、住宅の機密性の高まりとともに、昭和 30 年代以降、急速に普及しました。

〔資料説明〕

①火鉢　炭火で暖を取ります。温度は木炭の量と灰のかけ具合で調整します。五徳の上にはやかんやなべをかけていました。

②炭つぎ　火鉢へ補給する木炭をそばに置いておくためのもの。

③置きごたつ　中央にアンカを置き、周りをやぐらで囲み、上から布団をかけて使用します。一人用などもあり、コンパクトな大きさのため持ち運びも容易でした。

・調度品

戦後 10 年を過ぎてくると、人々の生活観にも変化が現れてきます。洋式の生活への憧れから大型家具を増やし電化製品を買い揃えていきました。しかし、和風住宅の間取りやふすまの仕切りは以前のままでやや窮屈な感じがしています。昭和 40 年代になると、ダイニングテーブルのセットや応接間のソファーなどが普及してきます。

〔資料説明〕

①白黒テレビ　日本でテレビ放送が始まったのは昭和28年のことです。34年の皇太子（現天皇）ご成婚を機に白黒テレビの販売が伸びたといいます。カラーテレビの普及は39年の東京オリンピックが契機となりました。

②整理ダンス　洋服ダンスと対で使われ、シャツやブラウス、下着などを収納します。表装はベニヤ板で仕上げられています。子どもが生まれるとベビーベッドを買い足したりもしました。

③黒電話　ダイヤル式のもので、当時は一般家庭で取り付けているところは多くありませんでした。

④ミシン　足踏み式のミシン。戦後の洋裁ブームで若い女性を中心に普及していきました。「嫁入り道具」の一つ。

⑤ふすま・しょうじ　部屋を仕切る建具。中ほどにすりガラスの絵のあるのは大正期以降の流行です。

⑥柱時計　ぜんまいを動力にした振り子時計です。1週間、1ヶ月ごとにネジを巻く必要があります。

⑦白熱灯　蛍光灯が登場する前の照明。通常、1部屋に1個吊り下げられていました。それ以前は石油ランプを使用していました。

⑧蚊帳　クーラーや扇風機がなかった頃、主に夜、寝室に吊るし、虫の侵入を防ぎました。部屋の広さに応じて買い揃えました。素材は麻や木綿、合成繊維などが使用されています。

・生活用品

展示品の中には今ではほとんど使われなくなったものもあります。また、素材も簡単に成型できる樹脂が多用されています。

〔資料説明〕

①はたき　棚や障子の桟などの埃を掃うための掃除道具。ささ竹とハギレで自作しました。

②着物　仕事から帰った父親は家では和服に着替えてくつろぎました。

③下駄　まだ和服を着ることが多かった時代、ほとんどの家庭に下駄がありました。町の履物屋さんを「下駄屋」と呼んでいました。まだ「下駄箱」という言葉が残っていますが、現在「下駄箱」に下駄は入っておらず、「靴箱」と呼ぶようになりました。

④和傘　油紙と竹で作られた伝統的な和傘は昭和30年代の半ばまでは多く使われていました。高級な「蛇の目傘」と日常用の「番傘」がありました。

⑤洋傘　「コウモリ傘」と呼ばれていました。この頃のものは、今のようなポリエステル製ではなく木綿製でした。このため、長く使っていると雨が染み込んできて重たくなりました。

◆庭先（庭仕事・洗濯）

むかしの一戸建ての家の多くには庭という空間がありました。特に農家では重要な農作業の場所でもあり、一般の家庭でもちょっとした作業や物干しなどの作業空間でもありました。また使わなくなったものの置き場所にも利用されました。子どもたちにとっては安全な遊び場でした。

体感できること	注　目　点
○子どもたちの遊びや家の手伝いを通して、この時代の子どもの生活を感じさせる。	○洗濯物の取り込みやニワトリの世話など、子どもたちにもできる仕事が多くあったこと、また、家の中での子どもたちの役割などを知る。 ○手洗いから電気洗濯機へと変わっていくことを実感する。

・庭仕事

縁側や庭先は、大人にとっては洗濯物を干したり、ござを広げて野菜の整理をしたり、石臼を使って粉類を作ったり、屋内ではできない仕事をする場所でした。子どもにとっても、メンコやビー玉、ボール遊びなどができる格好の遊び場になりました。

〔資料説明〕

①むしろ　わらで編んだもので、穀物などの天日干しに使いました。

②ござ　たたみ表をはいだもの。むしろと同じように使用する場合もありますが、むしろよりいろいろな用途に使用されます。子どもたちのままごとの必需品でもあります。

③しょうけ　竹で編んだかごで、多くのバリエーションがあります。ちょっとした物入れやふるいなど、いろいろな用途に利用します。

④碾き臼　上臼を回転させ下臼とすり合わせて穀物を砕き、粉を作ります。すり合わせ面の溝からすりあがった粉が外に出てきます。製粉時に熱が加わりにくいため、穀物の栄養素や香りが壊れにくくなっています。

・洗濯

固形石鹸を使って木製の洗濯板とたらいで洗濯します。井戸の周りやポンプの近くなど、水場で洗濯しました。たらいに水を張り、腰をかがめて洗い、すすいで絞って干す作業は、主婦にとって非常に辛い重労働でした。そのため、電気洗濯機が高額だったにも関わらず、急速に普及していきました。電気洗濯機は、「三種の神器」と呼ばれたテレビ、電気冷蔵庫とともに生活に革命的変化をもたらしました。

〔資料説明〕

①洗濯板　波型の凸凹は裏表でカーブが逆になっています。洗うときには石鹸液が溜まるように弧が下に、すすぐときには水切れがいいように弧が上にな

庭先の様子

るように工夫されています。

②たらい　多くは木製の桶。古くなったら桶屋でタガを替えるなど、修理ができ長く使うことができます。

③電気洗濯機　初期の洗濯機は、展示資料のようにローラーをくぐらせて脱水していたので、その際にボタンが割れるなど、使い勝手がよいものではなかったようです。

※展示品はナショナル角型噴流式電気洗濯機 MW-303（1954 年製）
　当時の価格　　28,900 円

④洗い張り板　着物をほどいて洗濯するときに使います。糊をつけてこの板に張って乾かします。

⑤物干し台　物干し棹が 2～3 段かけられるようになっています。ミツマタで棹の上げ下ろしをします。

＜参考文献＞

「20 世紀フォトドキュメント」第 2 巻　社会・事件　　ぎょうせい発行
「20 世紀フォトドキュメント」第 3 巻　生活と風俗　　ぎょうせい発行
「20 世紀フォトドキュメント」第 4 巻　教育　　ぎょうせい発行
「久留米市史第 4 巻」久留米市発行
「久留米市史第 6 巻」久留米市発行
「カメラがとらえた久留米の 100 年　私の街、私の時代」久留米市教育委員会発行
「目で見る久留米の歴史」久留米市発行
「昭和家庭史年表」河出書房新社発行
「昭和のくらし博物館」河出書房新社発行
「ちょっと昔の道具たち」河出書房新社発行
「昭和の小学生大百科」宝島社発行
「写真で見せる回想法」弘文堂発行